

NPOパートナーシップ協力プログラム 事業終了報告書

団体名 一般社団法人 閑上の記憶

代表者名 代表理事 丹野 祐子

1. 事業名

「閑上の記憶」「いのち」への気づきを次の世代へ、地域住民主体となった持続可能な伝承活動基盤づくり

2. 事業カテゴリー

夢を応援

3. 事業期間

令和4年3月1日 ～令和5年2月28日（365日間）

4. 契約金額

4,016,280円

5. 担当者名

武田絵莉香

6. 事業目的

名取市閑上地区の地域住民が主体となった伝承活動の継続と、人材の獲得・育成を通じた持続可能な活動基盤を形成する

7. 事業の成果

閑上で被災した住民たちが、自らが被災した現地を「学びの場」とし体験を語ることで、鮮烈な印象をあたえ、プログラムの参加者の記憶に残る伝承活動が行えた。

震災学習ワークショップを体験した北海道の中学3年生の感想の中には「人が生きていたその魂を感じた」「命の大切さの意味が身体を震わせるような感じで伝わってきた」というものもあり、五感を通じて学ぶこの活動はより深く「生と死の意味」に迫るものとなったのだと感じている。こうした体験の提供は、参加者への効果だけでなく、他者の命の尊さにも目が向くことで、より良質な教育環境、生育成育環境へ変化することが期待される。

また、地元で被災した当事者が語り部や案内人として震災を伝えることが、自らの被災体験に向き合う時間となり、参加者からのフィードバックや交流が、本人の更なる心の再生につながった。

そして活動を通じ、自らの被災体験を伝えることが、それが「未来へつながる」という手ごたえや語る意義を感じられ、「命の大切さ」「震災を伝える」ことに使命感を持つことで、自分たちのコミュニティや地域が、今後どうあるべきかと再考する機会となったことも大きな成果であった。

8. 事業種別(コンポーネント)ごとの成果

コンポーネント①「震災を知らない世代に向けた語り部講話・案内ガイドの強化事業」

有料プログラムでは、広報等を強化し、延べ179回3061名が参加した。内訳は下記の通り。

・閑上案内ガイド 118件 2,632名参加

地元被災者が研修を通して正確な震災に関する知識を身につけ「案内人」となり、バス等に同乗して閑上地区を巡りながら、震災やいのちの大切さを自身の体験も交えて伝える約90分のプログラム。

・語り部講話 11件 132名参加

滞在時間の短い学校や団体・個人向けに「閑上の記憶」館内での映像資料の鑑賞と「語り部」による、震災からその後の様子等について自身の体験を伝える約40分から60分のプログラム。

・語り部の会 50回 297名参加

週末等に企画した、閑上の記憶館内での、語り部講話のプログラム。

当日参加も可能で、多くの方に語り部の話を聞いてもらう機会をつくる場として開催。SNS等でも告知を行った。閑上の記憶の語り部メンバーのほか、3.11メモリアルネットワークをはじめとした他地域の伝承団体・語り部が講話を行う回

もあり、語り部同士の学びあいにもつながった。

コンポーネント②「全国の人たちと「いのち」の大切さで繋がる3.11の追悼事業」

・約350名が現地参加、Instagramライブ、FacebookからリンクしたGoProをつかったWeb配信を行った。マスコミ20社が取材に入る。TV、新聞等で報道された。

(<https://kahoku.news/articles/20230311khn000083.html>)

・東日本大震災の被災遺族と、それ以外の様々な災害や事故で大切な家族を亡くした人たちが、「いのち」について考え、思いを馳せる時間を共有することができた。特に、8.12連絡会の美谷島邦子氏も参列し、集まることや追悼の場を開催し続ける必要性、伝えることの意味などを語られており、「いのち」を思うことで繋がるこのような場を作ること、そして大切な人を亡くした人同士が繋がることの意義を感じた。またノンフィクション作家の柳田邦男先生に会いたいという自死遺族の方も数名参加され、つながりが広がっていく場となっていると実感した。

・あの日を経験した子どもたちが、スタッフとして運営に携わることで、その意味や価値を次の時代に伝えていく、そして若い世代が震災と向き合う一歩となった。特に、当時小学校1年生で閑上小中学校初代生徒会長を務めた生徒が「命を少し軽視してしまっている現実、生きていることへの感謝、命の尊さ、大切さは私たち若い世代が率先して伝えていかなければならない。」「春から県外へ進学するが、どこへ行っても津波を経験した身として、震災を伝えていきたい」とスピーチしていた姿が、印象的であった。

コンポーネント③「“震災からの学びを社会へと還元する団体へ”新たな「会員制度」創設・運営事業」

・会員制度創出にむけ、団体のビジョン・ミッションを整理、自立した運営体制を協議した。

制度創設へ向けた、仕組みづくりや集客、広報方法を議論し、会員制度を創設。2022年3月から募集を開始。

2023年3月現在【団体7 学生4 一般112】 総計123が会員(クルー)となっている。

2022年3月11日「追悼のつどい」の会場にて募集開始。その後は通年募集。

・会報誌の発行

2022年6月、2023年1月に発行 郵送とメールにて送付

・会員同士の学びあいや、仲間づくり、社会への発信を目的にイベントや研修を3回実施。

○第一回 講演会 開催

「あの日から、ともに学ぶ」 日時:2022年10月29日(土) 40名参加。

講演者:第一部 佐藤敏郎(小さな命の意味を考える会)、丹野祐子(「閑上の記憶」)

第二部 菊地章博(仙台放送)、石橋英昭(朝日新聞社)、佐藤敏郎、丹野祐子 対談

司会:大野太輔(NHK仙台放送局)

○第二回 講演会 開催

「悲しみでつながる～こころ温まる明日のために～」 / 2022年10月29日(土)会場50名、ライブビューイング28名、

YouTube配信実施

講演者:第一部 柳田邦男氏(ノンフィクション作家)

第二部 柳田邦男氏と丹野祐子の対談

河北新報での広報により予想以上の反響があり、オンライン配信と隣会場でのライブビューイングを行った。

○研修会、他地域の伝承館見学や語り部講話

日時:2022年7月30日(土)日帰り / 参加:22名

七十七銀行女川支店行員家族 田村さんからご講話～女川町観光協会によるまち歩き案内～門脇小学校 解説ガイド 管理者より案内～MEET門脇、みやぎ東日本大震災津波伝承館見学

9. 事業全体を通じて得た教訓や課題等

「閑上の記憶」という場を開く意義は、人が集まり、繋がりを創出することにある、ただの資料館ではなく「番人」(スタッフ)の存在が話を聞いてもらうことができるのだと再確認した。

地球のステージからの独立1年目に、「ともに学ぶ」というスローガンのもとに研修会を開催し、今までなかった新しい形での講演会の開催など、大きな動きができたことは大きな財産となった。

また、運営面では、今まで助成金頼りだった活動費を、会員制度により会費収入の比率を増やすことで、自立的な運営への第一歩を進められた。今後はさらに収益(主にプログラム収入)をあげる工夫をし続けていかなければいけない。そして命の教育や防災や減災につながる活動が活性化し、地域へ波及することで、災害に強い街づくりを実現したい。

10. 協力体制の構築

・3月11日追悼のつどいでは開催に際して複数の団体と開催の協力を行った

(名取第一中学校、8.12連絡会、NPO法人地球のステージ、東京サンライズ汐留ロータリークラブ)

- ・10月開催「ともに学ぶ」講演会、2月開催「悲しみでつながる」講演会では、他市町の伝承を行う団体や複数社のメディアと協力し実施した。実施に際して、メディア関係者には報道の在り方などを登壇し話していただくこと以外に、参加いただくことで、各社での記事掲載などの協力をいただいた
(小さな命の意味を考える会、仙台放送、朝日新聞社、NHK仙台放送局)
- ・語り部の会の開催については、3.11メモリアルネットワークと連携し実施した。

11. Civic Forceとの協働について

Civic Forceさんと一緒にできたことで、講演会のYouTube配信など、お断りするしかなかった方に講演を見ていただくことができ、あらたなチャレンジにつながった。さらに毎月の報告をすることで異文自分たちの活動を振り返り、反省、次に生かすことができる機会になった。